

図書紹介・New publications

**The Fishes of the Japanese Archipelago. 1985.**  
Hajime Masuda, Kunio Amaoka, Chuichi Araga,  
Teruya Uyeno, and Tetsuo Yoshino, eds. Tokai Univ.  
Press, Tokyo, 3 vols. Japanese version, xx+448 pp.,  
English version, xxii+437 pp., Plate section, 370 pls.  
(日本産魚類大図鑑. 益田 一, 尼岡邦夫, 荒賀忠一, 上  
野輝弥, 吉野哲夫編. 東海大学出版会, 東京. 図版+和  
文解説 ¥40,000, 図版+英文解説 ¥40,000, 三冊セ  
ット ¥50,000)

この本は魚類の図版集として、質量ともに世界で最も優れた出版物だと安心して言い切れると思う。この本について「無謀な試みの成功に驚きを感じる。」と的を射た発言をした方が居られた。この本の計画が進捗中、私は日本全体の魚を対象にする写真集ができるのだと思っていた。日本に産する全魚類のカラー写真を掲載する、どうしても生の被写体が得られない場合は標本の写真でも、それすら無い場合は、文献の図を引用してでも網羅する目論見だと知ったとき、私は驚き呆れた。この途方もない試みは、厳密な意味では達成不可能である。しかし一人の写真家と、明仁親王殿下を含む30人を超える魚類学者の共同作業の結果、想像もしなかったレベルの仕事が、而も予定に余り遅れず完成してしまった。

ほぼ同じ大きさの英文解説、和文解説、図版の三冊に分かれている。和英どちらかの解説と図版を組み合わせて、一セットができあがる実験的な構成になっている。当然、解説の内容は和英ほぼ同じで、国内海外双方の読者に対応できるように工夫されている。

この本の前身である同じ東海大学出版会から10年前の1975年に刊行された「魚類図鑑—南日本の沿岸魚」は、画期的な出版物であった。私は敬服しながらも、その第2版、またはそれに類する出版物に向けて微にいり細にいり、注文を付けた書評を書いた(魚類学雑誌, 22(4): 246-250, 1976)。

「日本産魚類大図鑑」では、私が注文を付けた部分が殆ど改善されてしまっているので、書く事が少なく面白くない程である。「南日本」に比べ遙かにきめの細かい目が届いている。原稿のミスや誤植は枚見されるが「南日本」と比べれば格段に少ない。

価格と重量がこの本の点弱といえはいるであろう。価格については、絶対額は確かに高いが、その内容、質を考えれば妥当ないし割安といってよい。重量の点(図版1850g 和文解説1900g 英文解説1850g)は、図版はこの内容をこの水準で表現する為には、仕方ないかも

しれない。解説部分は、紙質、内容等に工夫があれば、もっと軽くできたように思われる。気軽にフィールドに携帯するのは無理である。

写真の質は、一部の例外を除けば非常に高い。その一部とは、手を尽くしてもそれしか入手できなかったという性質のものである。カラー印刷技術も大変優れている。写真の背景は切り抜かれている。不正確に切り抜かれる場合があるので、余り望ましい方法ではない。背景が汚れていたりする場合、体裁の為にはこれしか方法が無いのであろうか。綴じ代と図版の端が近すぎて、見にくい場合が時々ある。

日本産の生の材料に基づくカラー写真が掲載されている種類数は2840である。雌雄、老幼、変異等で写真が複数の種類が多いので、写真点数は種類数を上回る。標本のカラー写真が75種、白黒写真が91種、他に外国産の材料に基づく写真が32種である。写真が無いので描画図を示したもの(大半は既に出版された図の引用)が272種ある。以上の数字には多少の出入りがあるかもしれない。日本に産するとされている種類で、この本で全く触れられていない種類数は300以上あるが、この中には疑問種が多数含まれる。「これだけ集めた、更に増やしたい」という足し算発想から、「これだけ足りない、足りない部分をどれだけ減らせるか」という引き算発想に転換したといえる。

巻末の36頁の図版に、白黒の図と写真がまとめられている。白黒図版には、北日本の魚が多い。また魚のグループによってカラーと白黒の比率が違っているのに気付く。どの地域、どのグループの魚類がどのように取り扱われていたかを、この本は浮き彫りにしているともいえる。例えばサイウオヤトビウオのように、幾らでも写真がありそうで盲点になっているグループもある。

3千種に近いカラー写真は、ともかくそれだけの実体(被写体)が現存していることを示している。これだけの数の生の写真を示したのが、この本の最大の功績である。

新種の記載は全く含まれていない。これは良いことである。未同定種、日本初記録種、和名の新称は多数含まれている。

各種類の解説は、和名、属和名、学名、計数形質、本文、分布の順になされている。解説の担当者、写真の撮影者の名前がそれぞれの種毎に明記され、責任の所在を明確にしている。本文は、大抵3-6行で形態の特徴、他種との区別点、生息場所、最大体長等が書かれている

場合が多いが、種類により著者により一定しない。解説に何を含ませ何を省くかの基準は、難しいとは思がこの本の計画段階で、もっと十分検討して頂きたかったと思う。魚類を研究している者の立場から言うと、その写真個体の採集地（撮影地）、標本番号（含、保管場所）等のデータを可能な限り含めて欲しかった。そのデータがあれば、科学書としての本書の価値は桁違いに大きくなったはずである。一般的解説は、図版を主体とするこの本には必要不可欠でなく、極論すれば無くても良かったと思う。アユとサケ科の種類の解説は特別に優遇されて大きなスペースを占めている。目や科や属の解説は、有る場合も無い場合もある。

著者は被写体を科学的に取り扱い、正確な同定を行うことで、貢献しているのもあって、解説文はその副産物なのだと思う。ハゼ亜目の多数の種に感覚管と孔器の配列の図が示されているが、ハゼ類の正確な同定の為に必要不可欠としても、この本の解説には馴染まないのではなからうか。この素晴らしい業績を更に充実させて、別の場で発表して頂くことを期待したい。似たことがブダイ科の咽頭歯についてもいえる。

多数の著者の共同作業では、避けられないことではあるが、解説のスタイルの統一は良いとはいえない。それぞれの著者の好みや主張と、全体の統一とをどこで折り合わせるかは、難しい微妙なところである。ニベ科に大きな文献の見落としがある。写真の誤同定も有るようである（コイチ）。編者に事前に気がついて欲しかった不都合な部分も幾つかある。

和名には規約は無い。しかしその変更は、許される場合とそうでない場合があると思う。変更が招く混乱が、変更しないことが招く混乱より少ないと考えられる場合と、語尾部分の微修正以外はなるべく控えるべきである。特に良く知られた名前の変更には慎重であるべきである。正当化できない和名の変更は、提案自体が受け入れられないであろう。この本の中にも、今後議論の種になりそうな和名の変更が含まれている。

それにしてもこれだけの人数の学者が共通の目標に向けて力を合わせたことは素晴らしいと思う。編者、そのアシスタントスタッフ、出版社の担当者の努力に深い敬意を払いたい。

図版では学名、和名の他に、写真標本のサイズと必要な場合は、雌雄、成魚、幼魚等の情報が各写真に付けられている。液浸標本のカラー写真が示されている場合、そのことは解説版の図の番号にマークを付けて示されている。このマークの意味は、この本の利用法の所に見落としでも不思議でないような形で出ているだけである。

図版内で明確な方法で断わって欲しかった。写真撮影者も図版の中で示す方が良かったと思う。

日本語版では和名検索 19 頁、科名だけの英名索引 2 頁、学名索引 36 頁、計 57 頁、英語版では英名索引 2 頁、学名索引 33 頁、計 35 頁がついている。解説文中にのみ出て来る名前は検索出来ないのが欠陥である。図版には索引が無い。和英どちらかの索引を見なければ、図の検索はできない。これは実際に使ってみて想像以上に不便である。図が判れば、解説版を見る必要の無い場合が多いのである。索引には相当のページ数が必要で、而も解説の索引と重複するので付けなかった事情は判るが、それにしても不便である。なにか良い工夫が無いものだろうか。

英語版日本語版共通して 35 頁を文献リストにあてている。もし和文論文であれば、欧文表示の後に和文でタイトルのみが示されている。文献を登載する基準は特に無く、各著者が持ち寄ったものをアルファベット順に並べただけである。最近の文献が多いが 19 世紀のものも混っている。なんらかの納得いく基準があれば、更に価値の高いリストになったであろう。

「魚類図鑑—南日本の沿岸魚」の発刊は、日本の魚類学を大きく飛躍させた。「日本産魚類大図鑑」の出現はそれを更に上回る前進である。押しつけがましい権威付けが無くとも、自然に本書は日本の魚類学のスタンダードになるだろう。次にどのようなものが何時現われるのか、大変楽しみである。

(Yoshiaki Tominaga 富永義昭)

**Fishes of the North-Eastern Atlantic and the Mediterranean (Poissons de l'Atlantique du Nord-Est et de la Mediterranee) Vol. 1. 1984.** P. J. P. Whitehead, M.-L. Bauchot, J.-C. Hureau, J. Nielsen, and E. Tortonese, eds., 510 pp. Unesco. 125 FF at the Unesco book shop. ISBN 92-3-00215-2

本書は Unesco から 1973 年に刊行された Check-list of the Fishes of the North-Eastern Atlantic and of the Mediterranean—Clofnam—に基き、これを更に発展させた叢書の第一巻である。前作は文字通り check-list で、シノニムリスト、卵稚仔と耳石に関する文献、それに分布と各国の標準名を簡単に記したのみで、実物を想起させる記述がないので不便であったが、本書は面目を一新して実用向けに作られている点で大いに評価されよう。編集も P. J. P. Whitehead, M.-L. Bauchot, J.-C. Hureau, J. Nielsen, E. Tortonese といった斯界の権威があたり、実際に各科の記述を担当する執筆者も 73 名

に及ぶ。日本からはマカジキ科とメカジキ科を担当した中村泉博士が参加しているだけである(執筆者一覧表には Nakamura, T. となっている)。扱われている種は 218 科, 1256 種であるが, 第 1 巻では Petromyzonidae から Anotopteridae, 第 2 巻では Mirapinnidae から Xiphiidae, 第 3 巻では Gobiidae から Linophrynidae までを扱い, 文献と学名, 地方名の索引は第 3 巻に載せられている。

本書の特徴の一つは 218 科に及ぶ科の検索があることであろう。Key は 2 分法で単純な形質が用いられ, 特に外部形態による検索が可能であるように配慮されているが, 逆に単純すぎて間違いも生じやすいという欠点がある。連続した key が 260 にも達するため, 素人や初学者がこの key だけで科名をあてるのは至難の技であろう。幸い, 科を代表する魚の図が検索の右の頁に並んでいるので, これで凡その見当をつけて key を併用すれば, 労力の節約となろう。第 1 巻では, 30 種以上を含む科, すなわち, ガンギエイ科, セキトリイワシ科, ホテイエン科, ハダカイワシ科などを除けば, 属と種の検索は比較的簡単である。科, 属, 種にはそれぞれ平易に特徴が記されている。分類は Clofnam を踏襲しているが, 科が統合された場合には欠番を作ったり, 科が細分されたり新たに加った場合には a, b, c のように添字をつけ, Clofnam の番号と一致するよう配慮されている。分類体系には特に触れていないが, その配列や名称で判断する限り, Regan のそれに忠実であり, この点でヨーロッパの魚類分類体系に与えた Regan の影響の大きさがうかがえよう。しかし逆に本書では, 日本産魚類リスト(日本魚類学会編, 1981)同様, 高位の分類の問題を意識的に避けたとも思われる。

このように本書は Clofnam と切っても切れない関係にあるが, Clofnam との大きな違いは, 各種の魚の図, 標識, それに色, 大きさなどの項目が設けられたことであろう。シノニムリストは前作からの 10 年近くの間に新たに判明したシノニムやまだ一般的に使われているシノニムを common synonyms としているだけなので, 細かなシノニムは Clofnam にあたっての方がよい。図は原図であったり, 引用図であったりで, その精緻さはまちまちであるが, 少なくとも第 1 巻ではすべての種に図がつけられている。検索には Clofnam area に分布する可能性のある種が時には載っているが, 図や記載はない。この他, 棲所, 食性, 繁殖などが簡単に記されている。分布は Clofnam 域に重点を置き, 地図には分布状況が general distribution area, continental shelf only, individual records, possible distributional area, doubtful

presence などに区分され, 線や点で表示されているので分かり易い。

さて, 第 1 巻は前述の通り科の検索と図以外に Petromyzonidae から Anotopteridae まで 63 科 427 種(数え違いがあれば御寛恕下さい)を載せている。内訳は無顎類 5 種, 軟骨魚類では, サメ類 74 種, エイ類 54 種, ギンザメ類 5 種, 硬骨魚類では, 軟質類 6 種, 等椎類 178 種, 項肩類 105 種となっている。この中には北大西洋にのみ分布していたカラフトマス *Oncorhynchus gorbuscha*, シロザケ *O. keta*, ギンザケ *O. kisutch* なども記載されている。移殖の結果現在では自然繁殖を行なっているとのことである。しかし, 第 1 巻では扱った種が沿岸性が深海性の分類群に属するものが多いせいから, サメ類を除けば, 本邦近海との共通種はきわめて少なく, Clofnam 海域が日本から遠い所にあることを感じさせる。ただ, ガンギエイ属を例にとれば, 31 種がこの海域から記載されているが, 日本との共通種は全く存在しないということは, 本属魚類の種分化の著しさを物語るとともに, 世界的な規模で本属の分類を再検討する必要性を暗示しているように思える。サメ類に限定すれば, 文献は比較的新しいものに準拠しているものの, 編さん時には未発表であった "Sharks of the World, Part 1 and 2" by L. J. V. Compagno (1984) をかなり参考にした節があり, そういう意味では Compagno (1984) に直接あたった方がより最新の, より詳細な情報が得られよう。なお, 本書では, シロカダラの学名を *Hexanchus nakamurai* Teng, 1962 としているが, Compagno (1984) は鄭火土 (1962) の論文は学位論文として提出された未発表のものとしみなし得るとして, *H. vulturnus* Springer et Waller, 1969 を用いている。

本書は Clofnam 海域における魚類の査定や生活史についての文献を探索するのに役立つだけでなく, 本邦近海に分布する近縁種と比較を行う際にも大いに参考となる。

## 引用文献

- Compagno, L. J. V. 1984. FAO species catalogue. Vol. 4. Sharks of the world. An annotated and illustrated catalogue of shark species known to date. Part 1 and 2. Hexanchiformes to Lamniformes. FAO Fish. Synop., (125) Vol. 4, Part 1 and 2, vi+ix+655 pp.
- Hureau, J.-C. and Th. Monod, eds. 1973. Checklist of the fishes of north-eastern Atlantic and of the Mediterranean. Vol. 1. Unesco, Paris, xxii+683 pp.

日本魚類学会編, 1981. 日本産魚名大辞典, 三省堂, 東京, vii+834 pp.  
 Regan, C. T. 1929. Fishes. Encyclopaedia Britannica,

14th ed., 9: 305-329, pls. 1-2.  
 鄭火土, 1962. 台湾産軟骨魚類の分類ならびに分布に関する研究, 304 pp.

会員通信・News and comments

New Smithsonian Ichthyological Reprint

The Smithsonian Institution Press announces publication of Volume 4 (eels) of P. Bleeker's Atlas Ichthyologique des Indes Orientales Néerlandaises. Price U.S.\$ 50.00.

Also available are Volumes 1 to 3, U.S.\$ 50.00 each, and the Plates for Tomes XI-XIV (single volume), U.S.\$ 250.00.

Payment must accompany all orders from individuals. Include U.S.\$ 1.50 postage and handling for first book and U.S.\$ 0.50 for each additional book. Order from Smithsonian Institution Press, P.O. Box 1497, Washington, D.C. 20013.

(Victor G. Springer)

北太平洋漁業国際委員会 (日米加) 底魚  
 国際シンポジウム開催のお知らせ

トピックス

1. Biological interactions of fisheries resources in the North Pacific region.
2. Environmental and biological factors affecting recruitment, distribution, and abundance of non-anadromous species.

日時: 1985年10月29~31日 9:30~17:00 (初日は10:30~)

会場: 石垣記念ホール (三会堂ビル6F, 東京都港区赤坂1丁目9-13)

通訳: 英-和同時通訳

参加申込: 参加無料, 専用イヤホン準備の為, 事前に池田郁夫 (水産庁遠洋水産研究所, 〒424 清水市折戸5丁目7-1, Tel. 0543-34-0715) まで郵便で

講演

1. Interspecific relationships in the eastern Bering Sea, with special reference to yellowfin sole. (Kiyoshi Wakabayashi)
2. Structure of demersal fish community and marine environment in the eastern Bering Sea. (Kohei

Kihara and Allen M. Shimada)

3. Trophic interactions of commercially important groundfish species in the eastern Bering Sea. (P. Livingstone)
4. Relationship between predation by sablefish and Pacific cod on abundance of Pacific herring. (D. Ware, G. A. McFarlane, and M. Stocker)
5. Energetics of juvenile pollock. (R. L. Smith and A. J. Paul)
6. Multi-species assemblage distributions in Hecate Strait. (J. Fargo and A. V. Tyler)
7. Nearshore interactions of juvenile chum and pink salmon. (M. Henderson and T. Beacham)
8. An application of the Leslie matrix-differential equation model in yield analysis of groundfish resources. (Shean-ya Yeh)
9. On the mechanism of drastic changes in species composition of Japanese neritic pelagic fish resources. (Tomoyasu Kawai and Kimiko Ishibashi)
10. Species interrelationships on food and habitat utilization in fishes of Shijiki Bay. (Hiroyuki Sudo and Masanori Azeta)
11. Estimating productivity of the pelagic ecosystem in the Japan Sea. (Yutaka Kitano and Kozo Kitani)
12. Recent information on the causes of variability in recruitment of Alaska pollock in the eastern Bering Sea: Physical conditions and biological interactions. (K. Bailey and R. C. Francis)
13. Effects of physical oceanographic factors on recruitment of flatfish species. (J. Fargo)
14. Hypotheses concerning recruitment in Pacific halibut and their implications in management. (R. B. Deriso, D. A. McCaughran, and S. H. Hoag)
15. Effects of physical oceanographic factors on recruitment of Pacific cod. (A. V. Tyler and S.